

<研究ノート>

英日翻訳における聖書引用箇所の訳文

—詩篇 23 篇の場合—

矢崎祐一

(東京外国語大学大学院)

The purpose of this study is to present how Bible quotations are actually translated when there is no shared familiarity with the Bible. In order to achieve this goal, this paper seeks to answer the following three questions: whether the translators of films and movies use existent Japanese translations of the Bible when they translate quotes from the Bible, what the translations place an emphasis on, and how the translations affect the message of the original text. Citations of Psalm 23 in films and movies are analyzed in order to answer these questions.

The study found that the usage of existent translations was not always referred to in a clear-cut manner. In addition, comprehension of the translated text receivers is more highly prioritized than faithfulness to the original text or to existent translations. The study also reveals that the message of the original text is changing in various ways through translation.

1. はじめに

発行部数 60 億部とも言われる世界最大のベストセラー(アッシュ 1996)、聖書¹が世界に与えた影響ははかりしれない。アメリカ合衆国などキリスト教国においては特にそうだろう。日本もその影響を受けている。日本はキリスト教国ではないが、翻訳大国ではある。特に英日翻訳の点数が多い。そして英語圏にはアメリカやイギリスなどキリスト教国が多い。ならば聖書のことばが引用されている英語の文章・映像が日本語に翻訳されることも大いに起こりうる。

では、実際に聖書に関する記述、特に聖書が引用されている箇所の翻訳にあたる時、英日翻訳者はどのように対処しているのだろうか。キリスト教文化圏ならば、特段クリスチャンをターゲットにしていない小説や映画で聖書箇所が引用されることも十分考えられる。本論文では英日翻訳される映画や小説の中でも大衆向けと想定される作品の事例研究を通し、次の3つの問い(リサーチ・クエスチョン)に答えることを目的とする。

- ①英日翻訳において聖書引用箇所を訳す際、翻訳者は既存の聖書の日本語訳を使用しているのか独自に訳しているのか。
- ②その聖書引用箇所の訳では、「ST(起点テキスト source text)への忠実性」、「既存訳への忠実性」、「TT(目標テキスト target text)の受け手の理解」のうち、どれに重点が置かれているのか。

- ③その訳により、ST が本来(明示的であろうと暗示的であろうと)発しているメッセージと TT が発するメッセージにどのような違いが生じているのか(あるいは生じていないのか)。

これらの問いに答えるために本論文では詩篇 23 篇を引用している映画及び小説の事例を取り上げた。英文や英語のスピーチで聖書に関する引喩がなされることは珍しくないだろう。本論文はそのような英文などを訳す一助となることが可能だと考える。

なお、本論文でいう英語圏とは、キリスト教文化の根付いている英語圏の国・地域を指す。そして「英語圏の読者」、「英語圏の視聴者」、「英語圏の受け手」と述べるときには英語を母国語とし、文化レベルで現れるような聖書知識を有する人々を想定する。一方、「日本の読者」、「日本の視聴者」、「日本の受け手」というときにも、単に日本に住んでいる人々などを指すのではなく、日本語を母国語とし、聖書のことば自体に対する知識はほとんどない人々を想定している。

2. 背景

2.1 英語圏と日本におけるキリスト教と聖書

21 世紀の現在、クリスチャン人口は欧米よりも非欧米の人のほうが多いとも言われる(古屋 2003)。それでも、アメリカ合衆国ではキリスト教会が選挙に対し影響力を持っていること(栗林 2005)など、キリスト教が英語圏でもつ影響力はやはり否定できない。

では聖書自体はどうか。清水(2007)の指摘によると英語表現には自然と聖書の表現が混ざっている。また水野(1995)はテレビのニュースを英日通訳しようとする際、聖書からの引用や引喩が多いことを指摘している。キリスト教文化のみならず聖書自体にも、英語圏の人々はいつの間にか触れていると言えるだろう。

一方で日本はどうだろうか。「愛」や「神」という言葉の意味はキリスト教により大きく変わり(鈴木 2006)、キリスト教主義の中高一貫校、大学も少なくない。しかし日本のクリスチャンは現在日本の全人口の約 1 パーセントと言われる(マリズ 2005)。キリスト教は日本社会に影響を与えはしながらも深く受容はされていないと考えられる。

では聖書はどうだろうか。信じはしないまでも、教養として身に着けるようなことはされているのだろうか。石黒(2006)で挙げられている例を見ると、聖書のことば自体はあまり知られていないと考えられる。2001年9月11日のアメリカ同時多発テロ事件の哀悼演説で、ブッシュ第43代アメリカ合衆国大統領(George W. Bush)は詩篇 23 篇を引用した。この引用について言及する際、ABC(American Broadcasting Company)のベテラン記者は具体的に「詩篇 23 章(石黒 2006: 159)」と箇所を述べた。それにも拘らず、これを日本語に訳した翻訳者あるいは通訳者は『ブッシュが聖書の一節を引用していた』ということだけを伝え、たが、「聖書のどの部分かは」言わなかった(石黒 2006: 160)。翻訳者(あるいは通訳者)は日本人の受け手が「詩篇 23 章」と言っても意味がわからないと判断し、「聖書の一節」と言い換えたのではないだろうか。聖書の内容の認知度が低いことを反映した訳だと考えられる。これは確かに一例に過ぎない。しかし、キリスト教や聖書の存在は認知しているが、聖書のことば自体に馴染みがあるとは言えない——それが日本人に見られる傾向ではないだろうか。

2.2 パラレルテキスト、引喩、引用文

英日翻訳における聖書引用箇所の訳文が本論文で扱う題材である。この題材にはいくつかの文章的な要素がある。それは パラレルテキスト(parallel text)、引喩、そして引用文である。この3要素をここでは掘り下げる。

まずはパラレルテキストを取り上げる。聖書は英語にも日本語にも翻訳されており、それぞれ原典の写本から翻訳されている。そのため、英語訳と日本語訳の訳語が対応しているとは限らない。つまり、聖書箇所が英語の映画・小説で引用され、それを日本語の聖書を用いて翻訳しようとするとき、そのまま置き換えがきかない場合があるのである。翻訳者が独自に聖書引用箇所を翻訳した場合、その翻訳と既存訳はパラレルテキストの関係にある。また英語訳聖書と日本語訳聖書もパラレルテキストの関係にある。Munday (2009)はパラレルテキストを以下のように説明している。

1. A text in the TL from the same domain as the ST. Such texts assist the translator in finding equivalents for technical terminology, typical rhetorical structures, etc.

(TL(目標言語 target language)に存在するSTと同じ分野のテキスト。等価性のある専門用語、典型的なレトリックの構造などを翻訳者が見つける助けとなる。)

2. A TT of an ST that may be compared with the ST to discover the translation procedures and translation strategy adopted. Electronic collections of such texts may be aligned to form parallel corpora and to assist descriptive analyses.

(STと比較できるSTのTT。比較を通して用いられている翻訳の手順や手法を見出せる。そのようなテキストを電子的に収集してパラレル・コーパスを作ることも可能であり、それは記述的な分析の助けとなる。)

(Munday 2009: 214 筆者訳)

既存の日本語訳聖書は翻訳者にとって「等価性のある専門用語、典型的なレトリックの構造など」を探す助けとなるはずである。Cuéllar(2007)も翻訳教育について述べる中で、翻訳の際に ST に対応するテキストを TL 内で見つけることの効果を説明している。このようにパラレルテキストを用いることは、聖書引用箇所を翻訳する際にも有益ではないだろうか。

また、引用は引喩のひとつのかたちであり、本論文で扱っている聖書箇所の引用は映画や小説において引喩(allusion)の効果を果たしている。映画や小説において聖書を引用する際、作者は何か伝えたいメッセージやもたらしたい効果をそこに乗せているだろう。Leppihalme (1997)によると、引喩のメッセージを(とりわけフレーズ単位で引喩がなされた場合)理解するためには受け手が自分で作者の引喩の意味を解明する必要がある。つまり、作者と受け手の間にある程度の共通認識がないと引喩の意味は理解できない。

本論文にあてはめてみると、聖書が引用されても受け手が聖書からの引用だと理解できなければいけない場合意味が伝わらない、ということになる。ここで英語圏と日本の聖書に対する認知度の差が影響を与えるだろう。

Kussmaul (1995) は文化的に引喩の翻訳が困難な場合、引喩自体ではなく引喩の機能を再現することをひとつの解決策として挙げている。そしてそれが難しい場合があることも認めている。それでも、聖書引用箇所を翻訳する際にもその引用箇所の機能を考えることは有益だろう。

さらに、本論文は聖書の引用箇所の訳文について探っていくのであるから、パラレルテキストと引喩のみならず引用文自体についても考えなければならない。Brownlie (2003) は既存訳が存在する場合、それを使用することが一般的であると述べている。だがこれはフランスの哲学書翻訳の事例研究の中での意見であるため、そのまま映画や小説の翻訳でも同じだとすることは短絡的だろう。ただしこのような翻訳手法が一般的であるとする分野があることは理解できる。なお、Brownlie (2003) の事例研究でも引用文を翻訳する際にいつでも既存訳の置き換えが行われているわけではなかった。

3. 研究対象

3.1 詩篇 23 篇

本論文では数ある聖書箇所の中でも詩篇 23 篇の引用に焦点をあてる。詩篇 23 篇は聖書読者にとって大変馴染み深い箇所である。Dyas and Hughes (2005) は詩篇 23 篇を“*This is probably the best known of all the psalms (Dyas and Hughes, 2005: 85)*” (おそらく最も良く知られている詩篇である 筆者訳) と述べている。また Jacobson (2009) は詩篇 23 篇がキリスト教の世界のみならず通常の音楽や映画の世界においても用いられていると指摘している。

3.1.1 詩篇 23 篇を扱う意義

なぜ詩篇 23 篇を本研究で取り上げるのか。その理由のひとつがこの知名度である。詩篇 23 篇は英語圏ではよく知られている箇所である。その一方、前章で紹介した「詩篇 23 章」を「聖書の一節」と言い換えた例のように、日本ではあまり知られていないと考えられる。この知名度の隔たりは引用箇所を翻訳する際の困難さへと通じ、翻訳もそう単純にはできないことになる。

さらに、この詩篇 23 篇は原則として独立したひとつの詩である。他にも有名な聖書箇所はある。だが、その箇所が散文の中の一文だった場合、検証にあたっては聖書内での文脈も考える必要が出てくる。詩篇 23 篇にそのような文脈がまったくないというわけではない。だが、散文の中の一文に比べれば、文脈を考える労を省くことができ、検証の複雑さを抑制することができる。

また、詩篇 23 篇のメッセージが明示はされていないことも本論文の素材として適している要素のひとつである。確かにこの詩篇では神が自分にどのように関わっているのか告白はされている。しかし誰かに何かを訴えかけるようなメッセージは明示されていない。メッセージが明示されていれば、引用元を知らなくともメッセージを受け取ることができるだろう。だがメッセージが明示されていないのならば、詩篇 23 篇の引用を読む・視聴する受け手が引用の意味を理解するにあたって認知度の差が影響を与えられよう。

3.1.2 詩篇 23 篇の内容

続いて、詩篇 23 篇の内容を少し説明する。まず AV (欽定訳 Authorized Version) の詩篇 23 篇を載せる。各行の頭についている数字は節を表す。

- 1 The LORD is my shepherd; I shall not want.
- 2 He maketh me to lie down in green pastures: he leadeth me beside the still waters.
- 3 He restoreth my soul: he leadeth me in the paths of righteousness for his name's sake.
- 4 Yea, though I walk through the valley of the shadow of death, I will fear no evil: for thou art with me; thy rod and thy staff they comfort me.
- 5 Thou preparest a table before me in the presence of mine enemies: thou anointest my head with oil; my cup runneth over.
- 6 Surely goodness and mercy shall follow me all the days of my life: and I will dwell in the house of the LORD for ever.

このように、詩篇 23 篇は全 6 節から成る詩篇である。神を羊飼いに見立てている。富井 (2008) は詩篇 23 篇を「牧者としてその民を導き守って下さる主に対する感謝と信頼に満ちた詩である (pp.744-5)」とし、関根 (1973) も詩篇の解説を行う中で、詩篇 23 篇は「信頼の歌」に分類されるとしている (p.423)。

慰めのメッセージとしてこの詩篇が用いられることもある。先にも述べたブッシュ元大統領の哀悼演説における詩篇 23 篇 4 節を引用について、ABC のベテラン記者はその引用が「多くのアメリカ人の心と気持ちにふさわしかったと、私は信じます」と述べているという (石黒 2006: 159-60)。

同時に、詩篇 23 篇にはすでにある程度固まったイメージがあるかもしれない。この詩篇の深い内容は無視して、詩篇 23 篇は詩篇 23 篇であることに意味がある、という考えである。とりわけ AV の詩篇 23 篇においてその傾向が見られるのではないだろうか。昔から引用され続けた結果、深く意味を考えずとも受けるイメージ (例: 権威がある) を保持しているかもしれない。

また詩篇 23 篇はプロテスタントの葬式で使われることが多い (Lucke, Gilbert and Barret 2005)。ユダヤ教式の葬式でも同様である (Kadden and Kadden 1997)。詩篇 23 篇には葬式の場で用いられる詩篇としての機能があると言えるだろう。

3.1.3 詩篇 23 篇の引用のされ方

知名度の高い詩篇 23 篇であるが、McCann (2009) は詩篇 23 篇の“secularization” (世俗化筆者訳) が生じていると指摘している (p.44)。Jacobson (2009) は歌と映画で詩篇 23 篇がどう用いられているか述べようとする中で、“Some are serious, others are not” (真面目なものもあれば、そうでないものもある一筆者訳) だと指摘する。しかし分類するとなると、真面目かそうでないか、では分類しきれない要素があるのではないだろうか。本研究では、詩篇 23 篇の引用のされ方を 4 種類に分類している。①神への信頼のある引用、②儀式的な／おまじないのような引用、③挑戦的な／神への信頼の欠如した引用、④言葉遊びの引用、の 4 種類である。

神への信頼のある引用はブッシュ元大統領の哀悼演説のような引用である。詩篇 23 篇の意味を理解し、神への信頼をこめて引用している場合を想定している。

儀式的な／おまじないのような引用は、詩篇 23 篇の内容自体は深く考えず、「聖書である」という点に着目した引用である。詩篇 23 篇の権威・イメージに頼っており、詩篇 23 篇の内容自体はこの引用では特に重要ではない。宗教のことばが、あるいは聖書からのことばが引用されているという事実の果たす機能が重要なのである。葬式における引用が必ずしもこれに該当するわけではない。用いる人によって意味合いが変わってくるからである。葬式の場での引用であっても、心からの引用であるならば神への信頼のある引用となる。

挑戦的な／神への信頼の欠如した引用もある。詩篇 23 篇の内容を踏まえながらも神に挑戦していたり信頼には疑問符がついていたりする引用のことである。

言葉遊びの引用は、メッセージ性は特になく引用の仕方である。ただ単に詩篇 23 篇のフレーズで遊びたいだけの引用はこれに該当する。

3.2 映画と小説

詩篇 23 篇の引用箇所の翻訳を検証するにあたり、本論文では映画と小説を用いる。映画と小説の中でも大衆向けと考えられるものを用いている。そのような映画や小説は幅広い層に向けた作品であり、英語圏と日本の聖書に対する認知度の差がよくあらわれると考えられる。

映画は吹替だろうと字幕だろうと字数や時間の制限を受ける。制約があるのだから、それゆえに映画は翻訳者が工夫を施さなくてはいけない領域が大きいだろう。すると、既存訳から離れたところで翻訳者がどのように聖書引用箇所に対処しているのか見やすいのではないだろうか。

また、映画も小説もフィクションの媒体であり、メッセージを明確にする必要はない。そのため、詩篇 23 篇の引用の意味が暗示的なものとなる可能性もメッセージ性の強いスピーチに比べると高まる。そうすると、詩篇 23 篇に対する認識の差が受け手の理解に影響を与えるのではないだろうか。

事例研究に使用した映画および小説は以下の通りである。

映画(日本での公開年順):

- ・ 救命艇(原題:*Lifeboat*) (日本では未公開。全米公開 1944 年)(字幕・吹替)
- ・ わが谷は緑なりき(原題:*How Green Was My Valley*) (1950 年)(字幕)
- ・ 宇宙戦争(原題:*The War of the Worlds*) (1953 年)(字幕)
- ・ エレファント・マン(原題:*The Elephant Man*) (1980 年)(字幕)
- ・ タイタニック(原題:*Titanic*) (1997 年)(字幕・吹替)
- ・ X-MEN2(原題:*X2*) (2003 年)(字幕・吹替)
- ・ ヴァン・ヘルシング(原題:*Van Helsing*) (2004 年)(字幕・吹替)
- ・ ジャーヘッド(原題:*Jarhead*) (2006 年)(字幕・吹替)

小説(日本語訳が発刊された順):

- ・ 呪われた町(原題: 'Salem's Lot) (著: スティーヴン・キング) (1977 年)
- ・ エレファント・マン(原題: *The Elephant Man*) (著: クリスティン・スパークス) (1981 年)
- ・ 静かなる水のほとり(原題: *Beside Still Waters*) (著: ロバート・シエクリイ) (1985 年)
- ・ ビーチ(原題: *The Beach*) (著: アレックス・ガーランド) (1999 年)
- ・ ザ・スタンド(原題: *THE STAND The Complete & Uncut Edition*) (著: スティーヴン・キング) (2000 年)

アメリカ作品に偏ってはいるが、製作・発表された年代も様々であり、アカデミー賞受賞作品や有名な監督・著者の作品も扱っている。知名度の高い作品であれば、翻訳の際により広い視聴者・読者層を想定しなければならないと考える。

確かにハリウッド映画は多い。だが大衆性は高いと考えられる。また古典は扱っていない。古典も扱うことができればさらに研究は深まるだろうが、古典を扱わなくとも、いまの時代において聖書引用箇所を訳す際の助けとなるという意味では現代の作品を扱うことは意義がある。

4. 研究方法

4.1 事例分析

本研究では前節で述べたサンプルを分析し、各サンプルに 3 つのリサーチ・クエスチョンひとつひとつを問いかけた。その集計結果を次節で示す。どこに重点の置かれた翻訳かというのは「ST への忠実性」、「既存訳への忠実性」、「TT の受け手の理解」という 3 点の優先順位をつけることによってはかった。この 3 要素を優先付けすることでわかる重点の置かれ方は確かに限定的ではあるだろう。だが、聖書引用箇所を翻訳する際に考える内容はこの 3 点に集約されるのではないだろうか。3 つ目のリサーチ・クエスチョンである ST のメッセージへの影響をはかるためには Berman (1985b/2004) で述べられている否定分析論を用いる。

4.2 Berman の否定分析論

Berman (1985b/2004) で述べられている否定分析論では、翻訳によって歪曲 (deformation) が生じているとし、12 の歪曲傾向を指摘している。歪曲とは原文の異質性をそのまま異質なものと受け入れず、受け手に合わせて異質性を排除 (あるいは拒否) してしまうことである (Munday 2008)。

英語圏で引用された詩篇 23 篇は日本の視聴者・読者にとって大いに異質性のあるものと言えるだろう。詩篇 23 篇は英語圏では馴染み深いのに対し、日本では馴染みが薄いと考える。本論文では、この歪曲を、英語圏の受け手がその作品における詩篇 23 篇引用箇所を受け入れるのと同じ感覚で、日本人の受け手が詩篇 23 篇に引用箇所を受け取ることで達成されていないことと考える。

確かに、歪曲のない翻訳など不可能だろう。しかしこの歪曲を通して ST のメッセージへの影響を見ることができるのではないだろうか。むしろこの歪曲こそ、その作品における詩篇 23 篇引用箇所の翻訳が与える影響にそのままなりうる。

さらに言うならば、詩篇 23 篇を引用しているとして取り扱う素材は小説と映画である。小説は

Berman(1985b/2004)がその歪曲を嘆いている媒体であり、映画は時間的制限などの数々の制限により歪曲が起こりやすい環境にある。

Berman(1985b/2004)が指摘した12の歪曲傾向のうち事例分析で見られた歪曲傾向を、Berman(1985b/2004)とマンデイ(2009)をもとにしつつ、本研究での用い方も絡めながらこの12の歪曲傾向を説明する。各歪曲傾向の名称の訳語はマンデイ(2009)を参照した。また、下記の引用の一部は、Berman(1985b/2004)の筆者による翻訳も含まれる。

- ・ 合理化: 文や文章が再構成され、文法的要素に影響を及ぼす歪曲である。SL(起点言語 source language)の文法的理由から文の語順が変わり、影響が出るとこの歪曲傾向になる。また、字幕の字数制限など制約に合わせた故の歪曲も合理化である。
- ・ 明確化: 原文で明確化されていない要素を明確にすること、そして翻訳によりSTよりも明確な要素が創出されることである。
- ・ 高尚化: 原文に基づき、原文を犠牲にした書き直しである。詩を翻訳する際により「詩らしく」しようとすることや、散文においてより「優美な」文を作ろうとすること、STと文体の雰囲気が違う場合も高尚化である。
- ・ 質的貧困化: STの用語や表現を、その用語や表現のもつ豊かさを「類像的」な豊かさに欠けた用語や表現で置き換えるときに生じる。「類像的」とは、その言葉・表現が指し示すものについて喚起されるある種のイメージである。
- ・ 表面に現れない意味のネットワークの破壊: テキスト全体を通して形成されている言語のネットワーク、作品内で生じるネットワーク(設定・舞台・場面)、文化的要素のネットワーク(葬式で良く用いられるという機能など)の破壊のことである。
- ・ 言語的体系性の破壊: テキストの一貫性が欠如するようになる歪曲のこと。原文の言語体系に存在しない要素がTTには入り込むと生じる。
- ・ 地域口語ネットワークの破壊ないしその異国風処理: 地域の口語や言語パターンのネットワークを破壊する歪曲、あるいはそのような要素をイタリックなど異国風処理で対処することによって生じる歪曲である。地域口語とは実際の方言や時代の古い言葉のみならずその地域に根ざした意味を持つ言葉を意味する。また、適用範囲は散文に限定しない。
- ・ 複数言語の重層性の消去: STにおいて共通語と方言が共存していても、TTでは共通語と方言の違いが消去されてしまうことである。なお、ここでいう「言語」とは、方言など、同一言語内に存在する様々な言語のことである。古い英語と現代の英語の同時使用によっても「重層性」は生じる。小説のみならず映画でも生じる。

なお、歪曲という言葉は否定的な印象を与えやすい言葉ではある。本論文ではこの歪曲という言葉を使い始めるが、それは否定的な意味で使うわけではない。歪曲という用語を用いるだけであり評価の意味合いはこめていないことを示すため、これ以降 Berman(1985b/2004)の *deformation* について述べる際は、「歪曲」、というようにかぎ括弧をつける。否定分析論についても同様の理由から、本論文ではかぎ括弧をつけて「否定」分析論と記す。

5. 結論

本節では各リサーチ・クエスチョンの集計結果に考察を加える。リサーチ・クエスチョンの結果の集計にあたっては、『ザ・スタンド(完全無削除版)』内の引用を2サンプルとして集計した。この小説では検証するサンプルが大きく2つにわけられたからである。

5.1 既存訳使用の有無

まずはひとつめのリサーチ・クエスチョンである、「既存の聖書の日本語訳を使用しているかどうか」について考える。結果を引用のされ方別に分類すると以下の通りになる。

表 1 既存訳の使用の有無・され方(引用のされ方別)

| 既存訳の使用の有無・され方 | 引用のされ方 | 数 |
|---------------|-------------------|---|
| 置き換え | 神への信頼のある引用 | 1 |
| 参照 | 神への信頼のある引用 | 7 |
| | 儀式的な／おまじないのような引用 | 1 |
| | 挑戦的な／神への信頼の欠如した引用 | 2 |
| 不明 | 神への信頼のある引用 | 2 |
| | 儀式的な／おまじないのような引用 | 3 |
| | 言葉遊びの引用 | 3 |

表からわかるように、必ずしも参照されていることが明らかなわけではない。字幕、吹替、小説と、3形態における翻訳を扱ったが、「小説ならば必ず置き換えをする」というような決まりは見られない。むしろ最も制限の少ないと考えられる小説で既存訳使用が3サンプルも不明となっている。「参照」と判断したサンプルが多いが、小説のように制約の少ない媒体ばかりを取り上げていけば「置き換え」か「不明」かにより明確に分かれていたかもしれない。なお、参照していないと断ずることができないのは、結局のところ翻訳者が実際どのように翻訳したかはわからないからである。

儀式的な／おまじないのような引用を行ったサンプルの多くにおいて、既存訳の使用は不明である。言葉遊びの引用を行ったサンプルには既存訳の使用が不明なものしかない。一方で神への信頼のある引用はほとんどが既存訳を参照している。

この情報だけから判断するのは危険ではあるが、ひとつの傾向がここにあらわれているかもしれない。詩篇 23 篇が引用されているということが重要な場合、または登場人物が真剣な思いで詩篇 23 篇の引用を行っている場合(ただし真剣におまじないを掛けている場合は除く)、既存訳の使用がわかりやすくなる傾向にあるのではないだろうか。

いずれにせよ、引用のされ方によって既存訳の用いられ方が違う。この結果から、引用箇所の機能を考える意義があるとわかる。

5.2 翻訳の重点

続いて、「どこに重点を置いた翻訳がなされているのか」というリサーチ・クエスチョンについて考える。なお、以下の表の集計にあたって、同程度の重点が置かれていると考えた要素については同じ順位に入れている。なお、ここで言う翻訳が置いている重点とは、翻訳者自身が意識した重点ではなく、TT から結果的に見える重点である。翻訳者自身が意識した重点とはずれている可能性もある。

表 2 翻訳の重点の置かれ方

| 重点 | サンプル数 | | |
|------------|-------|----|----|
| | 1位 | 2位 | 3位 |
| ST への忠実性 | 1 | 13 | 5 |
| 既存訳への忠実性 | 3 | 5 | 11 |
| TT の受け手の理解 | 16 | 3 | 0 |

「TT の受け手の理解」を最優先としたサンプルが圧倒的に多い。19 サンプル中 16 サンプルが「TT の受け手の理解」を最優先にしたという数字は圧倒的である。字幕、吹替、小説、引用のされ方を問わず、「TT の受け手の理解」が最優先されていると見なして良いだろう。意固地に既存訳に忠実であろうとしていない証拠と考えられる。

一方、「既存訳への忠実性」を最も重要視していないとしたサンプルが 11 もある。そもそも既存訳を参照しているかどうか不明のサンプルが 8 つあることと関連はしているだろう。だがそれでも既存訳を参照しながら、相対的にはいへ優先順位を最も低く設定したサンプルが 3 つあることも意味している。

小説は、映像翻訳のような厳しい制約がないため、既存訳による置き換えが物理的にはしやすい。だが実際のところは、完全に置き換えを行っているのは小説『エレファント・マン』のみである。小説に限らず、全サンプル中唯一の事例である。小説の他 5 サンプル中 4 サンプルについては、既存訳の優先順位を 3 位としていると考えた。残りの 1 サンプル(『ザ・スタンド(完全無削除版)』(1))も「ST への忠実性」と並んで 2 位と考えた。なお、そもそも既存訳を使用しているかどうか不明とした小説のサンプルは 3 つある。

当然、この検証方法には限界があるだろう。だが全体として、既存訳に固執せず、TT の理解を最優先している傾向が見られる。

5.3 ST のメッセージへの影響

最後に、3 つ目のリサーチ・クエスチョンについて考える。各サンプルを「否定」分析論にあてはめていくと、以下ようになった。

表 3 各サンプルに見られる「歪曲」傾向

| 「歪曲」傾向 | サンプル | 数 |
|-------------------------|--|------------|
| 合理化 | (『救命艇』吹き替え)、『わが谷は緑なりき』字幕、『タイタニック』字幕、 『タイタニック』吹き替え、『X-MEN2』字幕、小説『エレファント・マン』、 『静かなる水のほとり』 | 6 (7) |
| 明確化 | 『救命艇』吹き替え、『わが谷は緑なりき』字幕、『タイタニック』字幕、『タイタニック』吹き替え、『X-MEN2』字幕、『X-MEN2』吹き替え、『ヴァン・ヘルシング』字幕、『ヴァン・ヘルシング』吹き替え、『ビーチ』、『ザ・スタンド(完全無削除版)』(1)、『ザ・スタンド(完全無削除版)』(2) | 11 |
| 高尚化 | 『救命艇』吹き替え、『エレファント・マン』字幕、『X-MEN2』字幕、『ヴァン・ヘルシング』字幕、『ヴァン・ヘルシング』吹き替え、『静かなる水のほとり』、『ザ・スタンド(完全無削除版)』(1) | 7 |
| 質的貧困化 | 『救命艇』字幕、『わが谷は緑なりき』字幕、『ヴァン・ヘルシング』字幕、 『ザ・スタンド(完全無削除版)』(2) | 4 |
| 言語的体系的破壊 | 『わが谷は緑なりき』字幕 | 1 |
| 表面に現れない意味のネットワークの破壊 | 『救命艇』字幕、『救命艇』吹き替え、『わが谷は緑なりき』字幕、 『X-MEN2』字幕、『X-MEN2』吹き替え、『ヴァン・ヘルシング』字幕、『ヴァン・ヘルシング』吹き替え、『静かなる水のほとり』、『ザ・スタンド(完全無削除版)』(1)、『ザ・スタンド(完全無削除版)』(2) | 10 |
| 地域口語ネットワークの破壊ないしその異国風処理 | 『わが谷は緑なりき』字幕、『エレファント・マン』字幕、『タイタニック』字幕、 『タイタニック』吹き替え、『X-MEN2』字幕、『X-MEN2』吹き替え、 『ヴァン・ヘルシング』字幕、『ヴァン・ヘルシング』吹き替え、『ジャーヘッド』字幕、 『ジャーヘッド』吹き替え、(『呪われた町』)、『静かなる水のほとり』、『ビーチ』、 『ザ・スタンド(完全無削除版)』(1)、『ザ・スタンド(完全無削除版)』(2) | 14 (15) |
| 複数言語の重層性の消去 | 『X-MEN2』字幕、『X-MEN2』吹き替え、小説『エレファント・マン』 | 3 |

この結果だけから傾向を断ずるのは短絡的だろう。だが、説明をつけていくことはできる。

表からわかるように、「地域口語ネットワークの破壊ないしその異国風処理」の「歪曲」が最も多く見られた。つまり詩篇 23 篇の英語圏の中でもっているネットワークが失われているということである。英語圏では特に説明もなく受け入れる引用なのだろうが、英語圏と日本とでは詩篇 23 篇の文化への根付き方が違うのだから、説明が少ないとどうしても英語圏ではつながりうる文化的な要素が日本ではつながらないことが生じうる。基本的には詩篇 23 篇の性質が ST の中であらかじめ説明されていない限り、この「歪曲」を回避するのは難しい。ただし、儀式的な

／おまじないのような引用の場合、詩篇 23 篇を引用するという意味は薄まり、宗教的な要素さえ出れば良いため、回避しやすくなると考えられる。

2 番目に「明確化」が位置していることは、「TT の受け手の理解」の優先度が高いこととも関連付けられる。「明確化」が生じるということは ST では明確でない要素が TT の受け手のために明確にされているということである。「地域口語ネットワークの破壊ないしその異国風処理」と違い、「明確化」は基本的に不可避な「歪曲」ではない。よって、この「歪曲」傾向が多いことは「TT の受け手の理解」の優先度が高いことと合致する。

また、「明確化」だけでなく「表面に現れない意味のネットワークの破壊」も多いことから、詩篇 23 篇のどの役割が優先されているか察することができる。ストーリーの理解および内容の理解が優先されているのだろう。その一方で隠された役割(例:詩篇 23 篇の引用によってカトリック教会が力を持つ世界観を強化すること)は必ずしも拾い上げなくて良いという翻訳のされ方になっている。

英語圏と日本とでは詩篇 23 篇に対する認識が違うのだから、引用のもつ効果をすべて再現することは不可能と言って良いだろう。不可能な中で、翻訳者はどの要素を優先させるか選択することができる。そして意識的にせよ無意識的にせよ、翻訳者はストーリーに対する影響が強い要素を優先させていると考えられる。ただし全体としてはこう言えても、そもそも既存訳使用の有無でのように引用のされ方によっても左右されるだろうから、単純ではない。

本研究では、Berman (1985b/2004) の「否定」分析論を用いて分析を行った。それはつまり、基本的に翻訳の TT 志向の要素を見ることが前提となっている。このような前提のために見落としている部分もあるだろう。そして本論文で「歪曲」傾向と見なした箇所については、その翻訳を批判しているわけではないことを再度記しておく。

また、本論文では『宇宙戦争』字幕と『呪われた町』の TT のずれを捉え切れなかった。この 2 サンプルでは詩篇 23 篇の解釈が既存訳とずれていると捉えられかねない訳が見受けられた。だが、儀式的な／おまじないのような引用であると判断したため、聖書らしき言葉が用いられているという機能などが充足されていれば引用の機能は果たされている考えた。そうすると、聖書らしき言葉であれば訳は何でも良いということになってしまう。機能さえ充足していれば良いのだろうか。引用のされ方と「否定」分析論を組み合わせるためにこのような現象が起きたのだろうと考えられるが、このことを捉える枠組みを作ることができなかった。

6. 結び

前節で、各リサーチ・クエスチョンに対する答えを見た。各リサーチ・クエスチョンである種の翻訳傾向が見られた。だが、その傾向は傾向に過ぎず、翻訳を行う上での答えではない。多くのサンプルを検証したが、それぞれのサンプルにはそれぞれの文脈があった。例えば小説『エレファント・マン』では舞台設定、引用者の背景、引用者の心情、引用内容を用いた会話の成立、ST での引用には古い英語が使われていることなどを考慮に入れた翻訳が必要だろう。翻訳する際にも様々な選択肢があり、既存訳を使用するのかしないのか、使用するならどの訳か、参照にとどめるのか置き換えるのか、選ぶことができる。また、各リサーチ・クエスチョンについてだけでも、既存訳使用の有無は引用のされ方の視点からも論じたが、翻訳の重点は包括的

には見ていない。各リサーチ・クエスチョンを組み合わせることで生まれる複雑さはもはや傾向と呼べるようなものではないだろう。

そのため、本研究で扱ったサンプルに見られた傾向は、この傾向に従えば聖書引用箇所の優れた翻訳が必ずできるということにはやはりつながらないだろう。だが、聖書引用箇所を英語から日本語に訳す際の参考にはなると考える。本研究で扱った事例と類似した引用を行っている作品もあると考えられるからである。また、類似はしていなくとも詩篇 23 篇の引用の機能を考えることが有効である可能性はあり、その際に本論文で用いた 4 種類の引用のされ方を適用することもできるだろう。

「歪曲」傾向に関しては、文化的に受容のされ方が大きく違うのだから、内容がストーリーに絡んでいる場合「歪曲」が生じることはある種当然のことである。「歪曲」が生じることは悪いことではない。完全な翻訳など不可能である。聖書箇所が引用されたら有名な日本語訳聖書で置き換える、というようにハウツーで翻訳するのではなく、「歪曲」によつての伝わる意味がどのように変わるのかということを理解した上で訳すことが望ましいと考える。そのためには、作品内の文脈の吟味は欠かせない。

本論文では詩篇 23 篇という、詩であり認知度も英語圏で大変高い聖書箇所を取り上げたが、そうでない箇所の場合は想定すべき状況がまた違うと考えられる。また、なぜ今回のサンプルで見られた訳になっているのかということに関しては掘り下げることができていない。映画や小説といったフィクション以外の媒体における翻訳の研究、フィクションの場合でもより多くの小説、特に古典の翻訳の研究も今後の課題だろう。そして実際に受け手が聖書引用箇所の何を理解して何を理解していないのか、データで示す研究も今後の課題として挙げられる。

.....
【謝辞】

本論文執筆にあたり、東京外国語大学の鶴田知佳子教授、丹羽泉教授、河原清志先生、および横浜国立大学の山田和子先生にお世話になりました。ここに感謝の意を表します。

.....
【著者紹介】矢崎祐一 (Yuichi YASAKI) 2010 年 3 月東京外国語大学大学院総合国際学研究所言語応用専攻国際コミュニケーション通訳コース修了。日本通訳翻訳学会会員。

.....
【註】

1. 本論文でいう聖書とはカトリックおよびプロテスタント双方において正典と認められている聖書を指す。

参考文献

アッシュ, R. (1996) 『世界なんでも TOP10』(三省堂編修所・訳)三省堂 [原著: Ash, R. (1995). *The top 10 of everything 1996*. London: Dorling Kindersley]
Berman, A. (1985b/2004). 'Translation and the trials of the foreign', translated by Venuti, L.,

- in Venuti, L. (ed.). *The translation studies reader*(2nd ed). (pp. 284-97). (Originally published as 'La traduction comme épreuve de l' étranger ', *Texte* (1985): pp. 67-81).
- Brownlie, S. (2003). 'Investigating explanations of translational phenomena: A case for multiple causality', *Target*. 15:1: pp. 111-52.
- Cuéllar, S.B. (2007). Source language text, parallel text, and model translated text: A pilot study in teaching translation. (2009年11月29日情報取得。アクセスは以下から可能：<http://www.scielo.org.co/pdf/fyf/n20/n20a10.pdf>)
- Dyas, D and Hughes, E. (2005). *The Bible in Western culture*. Oxon and New York: Routledge.
- 古屋安雄 (2003) 『日本のキリスト教』教文館
- 石黒マリーローズ (2006) 『聖書で読むアメリカ』PHP 研究所
- Jacobson, K. (2009). Through the pistol smoke dimly: Psalm 23 in contemporary film and song. (2009年11月16日情報取得。アクセスは以下から可能：<http://www.sbl-site.org/publications/article.aspx?ArticleId=796>)
- Kadden, B.B. and Kadden B. (1990). *Teaching Jewish life cycle: Traditions and activities*. Colorado: A.R.E. Publishing, Inc.
- 栗林輝夫 (2003) 『シネマで読む旧約聖書』日本キリスト教団出版局
- (2005) 『キリスト教帝国アメリカ ブッシュの神学とネオコン、宗教右派』キリスト新聞社
- Kussmaul, P. (1995). *Training the translator*. Amsterdam: John Benjamins Publishing.
- Leppihalme, R. (1997). *Culture bumps: An empirical approach to the translation of allusions*. Clevedon: Multilingual Matters.
- Lucke, G. and Gilbert, B.R. and Barrett, R.K. (2005). 'Protestant approaches to death: overcoming death's sting', in Garces-Foley, K. (ed.). *Death and religion in a changing world*. pp. 122-46.
- McCann, J. C., Jr. (2009). *Great Psalms of the Bible*. Kentucky: Westminster John Knox Press.
- 水野的 (1995) 第12章:放送通訳のカレイドスコープ:文化的常識. (2009年12月29日情報取得。アクセスは以下から可能：<http://akasaka.cool.ne.jp/kakeru3/bs12.html>)
- マリンス, M.R. (2005). 『メイド・イン・ジャパンのキリスト教』(高崎恵・訳)トランスビュー [原著: Mullins, R.M. *Christianity made in Japan: A study of indigenous movements*. Hawaii: University of Hawai'i Press.]
- Munday, J. (2008). *Introducing translation studies*. New York: Routledge.
- . (ed.). (2009). *The Routledge companion to translation studies*. London/New York: Routledge.
- マンデイ, J. (2009) 『翻訳学入門』(鳥飼玖美子・監訳)みすず書房 [原著: Munday, J. (2008). *Introducing translation studies*. New York: Routledge.]
- 関根正雄 (1973) 「解説」『旧約聖書 詩篇』419-25.

- 清水護 (2007) 『英訳聖書の語学・文学・文化的研究』学術出版会
鈴木範久 (2000) 「聖書の日本語訳—略史と問題」『聖書と日本人』1-14.
—— (2006) 『聖書の日本語 翻訳の歴史』岩波書店
富井悠夫 (2008) 「詩篇」『新実用聖書注解』722-844.

【サンプル用資料】

聖書の英語訳

BibleGateway.com. (2009 年 12 月 30 日情報取得。アクセスは以下から可能：
<http://www.biblegateway.com/>)

【聖書の日本語訳】

- バルバロ, F. (翻訳) (1964/1980) 『聖書 旧約・新約』講談社
フランシスコ会聖書研究所 (訳注) (1968) 『詩篇 聖書 原文校訂による口語訳』中央出版社
松田伊作 (翻訳) (1998) 『〈旧約聖書XI〉詩篇』岩波書店
日本聖書協会 (1917/1982) 『舊新約聖書 引照附』日本聖書協会
—— (1955/1988) 『聖書 引照つき』日本聖書協会
—— (1987/1993) 『聖書 新共同訳 引照つき』日本聖書協会
関根正雄 (翻訳) (1973) 『旧約聖書 詩篇』岩波書店
新改訳聖書刊行会 (翻訳) 『新改訳 新約聖書 詩篇付』日本聖書刊行会
—— (翻訳) (1970/1978) 『聖書 新改訳』日本聖書刊行会
—— (翻訳) (1970/2004) 『新改訳 小型聖書 —引照・注付—』日本聖書刊行会

【DVD】

- キャメロン, J. (1997/1999) 『タイタニック』[映画]20 世紀フォックス ホーム エンターテイメント
ジャパン
ダンテ, J. (1953/2005) 『宇宙戦争(1953)』[映画]パラマウント ホーム エンターテイメント ジャ
パン
ヒッチコック, A. (1944/2006) 『救命艇〈特別編〉』[映画]20 世紀フォックス ホーム エンターテ
イメント ジャパン
メンデス, S. (2006) 『ジャーヘッド プレミアム・エディション』[映画]ユニバーサル・ピクチャー
ズ・ジャパン
シンガー, B. (2003) 『X-MEN2』[映画]20 世紀フォックス ホーム エンターテイメント ジャパン
ソマーズ, S. (2004) 『ヴァン・ヘルシング コレクターズ・エディション』[映画]ユニバーサル・ピク
チャーズ・ジャパン
リンチ, D. (1980/1999) 『エレファント・マン』[映画]パイオニア LDC

【小説】

Garland, A. (1997). *The beach*. New York: Riverhead Books.

ガーランド, A. (1999) 『ビーチ』(村井智之・訳)アーティストハウス [原著:Garland, A. (1997). *The beach*. New York: Riverhead Books.]

King, S. (1975/1999). *'Salem's lot*. New York: Doubleday.

King, S. (1990/1991). *THE STAND The complete & uncut edition*. New York: New American Library.

キング, S. (1977/1983b) 『呪われた町(下)』(永井淳・訳)集英社 [原著:King, S. (1975). *'Salem's lot*. New York: Doubleday.]

キング, S. (2000b/2004e) 『ザ・スタンド V』(深町眞理子・訳)文芸春秋 [原著:King, S. (1978/1990). *The Stand The complete & uncut edition*.]

Sheckley, R. (1953/2009). *Beside still waters*. (2009年12月29日情報取得。アクセスは以下から可能:

<http://www.gutenberg.org/files/29446/29446-h/29446-h.htm>)

シェクリイ, R. (1985/2007) 「静かなる水のほとり」(風見潤・訳)『人間の手がまだ触れない』(稲葉明雄ほか・訳)pp.327-36. [原著: 'Beside still waters', in Sheckley, R. *Untouched by human hands*.]

Sparks, C. (1980). *The Elephant Man*. New York: The Random House Publishing Group.

スパークス, C. (1981) 『エレファント・マン』(速水精三・訳)ヘラルド出版 [原著:Sparks, C. (1980). *The Elephant Man*. New York: The Random House Publishing Group.]